

移民農業労働者の身体をめぐる配慮と排除のポリティクス
—高冷地園芸における労使間ケア秩序の分析—

飯田 悠哉

近年、農業や食品製造業など、食の商品連鎖に連なる産業において、職業上の健康被害の発生率が移民労働者に偏って極めて高くなっている。本研究は農業社会学の観点から、事例地における質的調査・定点観測にもとづいて農業移民労働者の健康被害の社会的要因を探究する。具体的課題は、2010年代に著しく労働の移民化が進んだ高冷地園芸における雇用農家と農業労働者（日本人季節雇と外国人労働者）との労使関係の秩序変化を、身体をめぐるケアの政治の視座から分析することである。これにより、職業上の健康被害が社会的要因によって発生し、再生産されていく機序を明らかにする。

ここで身体をめぐるケアの政治とは、労使それぞれの主体がもつ傷つきやすい身体（可傷的な身体）に対して、その可傷性をどのように利用し、どのようにケアするのか・しないのか、という労使間の「ケア秩序」をめぐる階級間で歴史的かつ日常的に争われる政治を指す。とくに、ケアという多層的な営みの中でも、相手の身体状態に「注意」や「配慮」をはらうこと、あるいは注意や配慮の対象から相手の身体を排除することの政治性が決定的な重要性を持つ。一般に、ある主体を労働力化することは対価と引き換えに一定程度、その主体の身体の可傷性（傷つきやすさ）を侵襲することで生産に利用するものである。だからこそ雇用主農家は法的にも倫理的にも労働者の健康・安全への配慮義務を負うが、規模拡大化圧力のもとでときとして身体・健康を無視してでも生産の拡大を追い求める傾向を持つ。他方で労働者は自らの身体への受傷や異変を疲労や苦痛というかたちで感知し、侵襲してくる危害を避けるための防御行動をとる「健康への権利」を有するが、他方で賃金獲得のために自らの身体を犠牲にする場合すらある。本研究において、高冷地園芸産地という生産に特化した空間は、このように対立しつつも、双方ともにジレンマを抱えた農家および労働者が、可傷的な身体へのケアをめぐる階級間で秩序構築のヘゲモニーを争ってきた空間である。

こうした視点にもとづき、序章では労災統計における移民に偏った職業上の健康被害の状況を整理し、さらにケア秩序、ケアの政治、および可傷性や脆弱性などの概念について本研究での用法を整理し、調査方法および事例地の概要を説明した。つづく1章から5章においては、それぞれ、移民労働者化以前の日本人季節雇の「逃散」の論理（1章）、移民労働者化に伴う労使間ケア秩序の変化（2章）、エージェント（送出会社および事業協同組合）の移民労働者に対するケアと支配の二重的機能（3章）、身体に対する「遅い暴力」に直面した移民労働者自身の男性性規範による連帯の困難と自らの脆弱性の再生産（4章）、コロナ禍で鋭く観察された入国管理政策および農業政策における移民労働者の身体へのケアの欠如（5章）を明らかにした。

大規模高冷地園芸におけるかねてからの日本人季節雇および外国人技能実習生ら労働者と、雇用農家らとの労使関係を分析したこれらの章を通じて、本研究は、2010年代の労働力の移民化に伴って、労使間のケア秩序が変化し、労働者の可傷的な身体が雇用主の注意・配慮の範疇からも、また自らとりうる防御行動の可能性からも排除されることで健康被害リスクに対して脆弱化されてきたことを論じた。さらに現場の労使レベルで把握されたこうした労働者の「ケア（配慮）からの排除」という状況が、移民政策および農業政策という国家レベルでの政策をも貫いていたことをコロナ禍における農業労働の動員に関する政策分析から示した。

終章では、マイケル・ワッツらによって展開された脆弱性の3つの位相、すなわちリ

スクやストレスへの曝露という外的な位相、内的な対処・防御行動の手段の欠如という内的な位相、および回復の遅滞・危機の再生産という時間的な位相のそれぞれに沿って、移民化に伴うケア秩序の変化が労働者らの健康被害に対する脆弱性を深刻化させた機序を再度確認した。このように本研究では、現場および政策の双方を貫いて観察された労働者の可傷的身体へのケア（配慮）からの排除が、労働者の脆弱性を深刻化させ、構造的な健康被害に帰結してきたと論じた。

そのうえで本研究からの含意として、先行研究において労働の移民化によって達成されたとされる農業経営の維持や拡大、発展は本研究によれば労働者の脆弱性を利用することによって達成されたと解釈されるべきであり、決して言祝ぐべき「発展」ではないことなどを論じた。補論において、こうした脆弱性を利用した集約化というべき蓄積行動が農業だけでなくフードシステムの各所を覆っていたことを食料品製造業での調査を踏まえて明らかにした。結びとして、2010年代に格差と食の貧困を深めた日本社会において、外国人労働者の脆弱性こそが、社会不安に至らない程度に低廉な食の供給を可能にしてきたことについて、同時代的な資本主義論との関連で掘り下げていく必要があることを主張した。